

戦後七十年をむかえて

西谷山小学校 六年 上村 有香

今年には戦後七十年。テレビなどでいろいろな戦争に関する番組やドラマがあった。その中でわたしが心に残ったのは、「永遠の0」という映画であった。この物語の主人公は、生きて帰りたいと願う特攻隊員だった。私はこの作品を見て、戦争についてさらに関心をもった。

戦争は、多くの人々の命をうばっていく残こくなものである。とくに特攻隊は、自ら死んでいく。特攻隊員の一人はこのように言っていた。

「日本のため、家族のために戦争に行くのだと教えられてきたが、いざふたを開けてみれば殺人兵器と世界中から言われてしまった。」この人は、今でも人を殺したことを後悔している。そして、もう一人の特攻隊員の生き残りは、

「日本のために死ななければならぬが、本当は生きたいという気持ちが大きかった。」と、言っていた。戦死した人は、みな生きていと心から思っていたはずだ。

私の身近な人で、実際に戦争を体験した人がいる。それは、祖父と祖母である。祖母から戦争についての話を聞いた。

祖母が十才の時に行われた戦争は、今でも頭からはなれないという。

祖母が十才の時に行われた戦争は、今でも頭からはなれないという。

祖母は、昔東谷山方面に住んでいた。登校中、五回に渡る空しゅう警報が鳴ったら、登校をやめ、急いで防空ごうの中に入っていたそう。そして、爆だんが実際に落とされた時の様子も覚えていた。爆だんは、今の谷山中学校の近くにあった田辺工場という所に落と

されたそう。そして、祖母の家族は、アメリカ軍から逃げるために、病気の姉とお腹が大きい母を連れて、さらには父が牛を引きながら、歩いて伊集院まで行った。その途中祖母は、もう帰ってくることはないだろうと心の中で思っていた。いつ攻げきされるかわからない中、家族が無事に伊集院までたどりつき、しばらくして戦争は終わりをむかえたのだ。当時のことを祖母は一言で、

「とてもこわかった。」と、言っていた。自分がそういう時代に生まれていたらと思うと、恐ろしくなった。

また、祖母は、広島と長崎に落とされた原爆についても教えてくれた。日本は、世界でゆいいつ原爆を落とされた国である。原爆落下直後、一しゅんで何万人という人々が苦しみながら死んでいった。今でも、後いしゅんで苦しんでいる方々もいる。

戦争は二度としてはならない。今の平和は、だれのおかげであるのだろう。私たちは戦争の悲しさを忘れることなく、また、次の世代にこの平和を引きついでいけるように心がけていかなければならない。

私はこの夏、戦争や平和についてこれまで以上に考え、しるこができた。これからも平和な日本が長く続くことを願っている。